

## ぎよ ぐ ぎよ ほう 漁具と漁法④

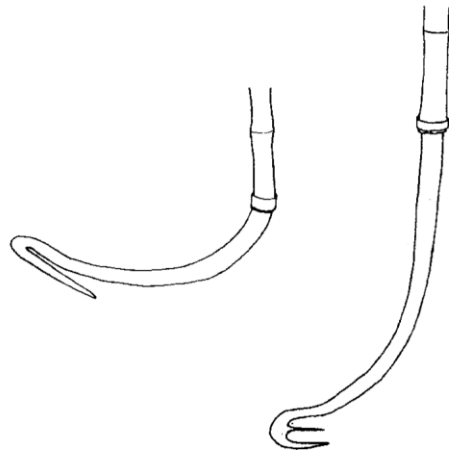
### —突く—

モリやヤスで突いて魚を捕るには、船上から行う方法の他、海へ入ったり潜ったりして、突くものがある。火ぶり漁は、魚の動作の鈍った夜に行い、潮の引いた海底を灯火で照らしながら、魚を突いて回る。すばやく放つためにゴムを付けたものもあり、魚影をとらえて突くには相当の熟練を要した。

ウナギかきは、泥の中に潜むウナギを引っかけて捕るもので、干潮時に海に入るととるものと、柄を長くして船上から使用するものがあった。

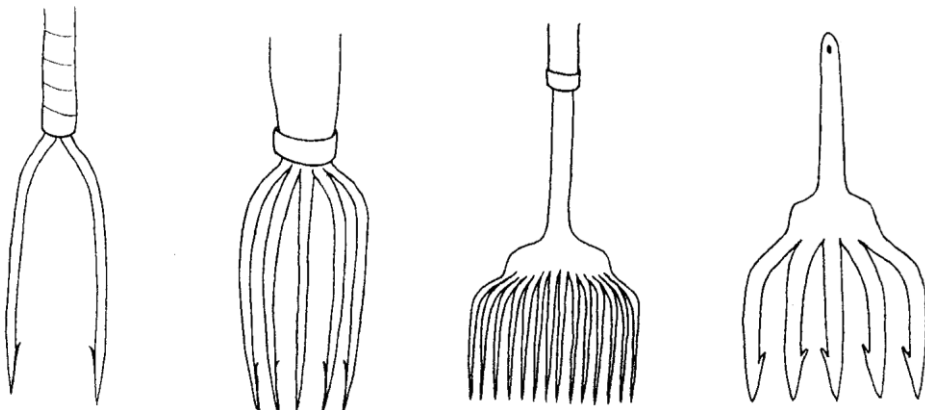
#### ●ウナギかき

ウナギを引っかけて捕獲する道具。  
竹や木の柄の先端に、彎曲した鉄製の鉤をつけたもので、泥中に潜むウナギを捕った。



#### ●モリ・ヤス

モリもヤスも魚を突き刺して捕獲する漁具である。刃先の長さや本数、返しの有無など、対象とする魚種や漁法によって、違いがみられる。火ぶり漁では、藻や砂中に隠れているウナギやカレイ、カニなどを突いた。



## ぎよ ぐ ぎよ ほう 漁具と漁法⑤

### —とる—

藻や貝類をとる道具には、船で曳いてとるもの、船の上からとるもの、干潮のときに海に入ってとるものなどがある。海辺でとれる藻類や貝類は、格好な田畑の肥料ともなり、海産肥料の採取も盛んに行われた。化学肥料のなかった時代において、農家にとっては、こうした海産肥料はたいへん重要なものであり、乾燥させて自家の田畑に用いたり、他所へ売ったりした。

- オゴかき……干潮の海に入り、オゴ（オゴノリ）をとる道具。とったオゴは、腰に結び付けた網袋に入れて下げ歩いた。また、長柄のものは、船上からオゴを掻きとるのに使った。オゴは食用にした。
- オゴまんが…船で曳いて、オゴを採取した。
- モツボたも…干潮の海に入り、藻の上を押し歩いて藻に付着するモツボ（巻貝の一種）をとった。網の下にスレ止め用のワラ縄を付け、擦り切れるのを防いだ。モツボは灰にまぶして干し、田畑の肥料にした。
- モツボ曳……船曳用。浮き上がらないよう重りの石を付けた。
- かがみ……海中をのぞきこむ道具で、底はガラス張りである。紐を首にかけ、板の一边を口にくわえて海水に押し込み、海中を見定めた。ワカメの採取や天草とりなどに使用した。
- 大とぐし……アマモを掻きとるもので、綱を腰に結び、柄を肩にかついで藻を根こそぎ掻きとった。藻は、伝馬船などに積み込んで運んだ後、草やワラと交互に積み重ねて、堆肥にした。
- ゆすぎザル…ミジという小さな貝を採取する筈。泥の中にいるミジを大とぐしで筈に掻き込み、泥を洗い落として貝をとる。ミジは肥料にした。
- こまざら……浜辺に打ち寄せられた藻をよせ集めたり、藻を干すときに使った。
- アサリかき…網袋を付けたものや、鉄製のかご付のものなど次第に改良された。
- チンメかき…チンメ（赤貝やサルボウ）をとるもので、船で曳いて捕獲した。
- 鳥貝まんが…引綱を付けて打瀬船などから投入し、海底を曳いて鳥貝をとった。鳥貝は、江戸時代から盛んに捕食された。

